

国際化いろいろ

東京大学大学院理学系研究科物理学専攻 長谷川 修司



海外留学の送り出しや受け入れをしやすくするというふれこみで、東大の「秋入学」の議論がしばらく前まで新聞紙上を賑わせていたが、結局それは断念したものの、こんどは学事暦を「クォーター制」に変え、6～8月に海外大学のサマースクールに参加する学生を倍増させようという動きが始まった。そんななか今年の7月はじめ、サンフランシスコ空港で起こったアジアナ航空機着陸失敗事故では、アメリカのサマーキャンプに参加するはずだった多数の中国人高校生が乗っていたとの報道もあり、別な意味で驚いた方も多いのではないかと思う。さらに今日（2013年8月16日）のニュースによると、来春、文科省は「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」なる高校を100校指定し、「世界と戦えるグローバルリーダーを育てる新しいタイプの高校」を目指すそうだ。国際化、グローバル化の大合唱が大学学部教育から中等教育までに及ぼうとしている。産業構造や労働市場の国際化のなかでの日本の成長戦略の一貫という。

日々、世界を相手にして仕事をしている研究者から見れば、国際会議での発表や海外のジャーナルへの論文投稿・査読、海外共同研究者とのやりとり、海外からの招聘や実験のための渡航などなど、ことさら国際化などと声高に言う必要もないと感じる方も多いと思う。一方、日本の学会を見てみると、どの学会も英文ジャーナルの刊行と国際会議の主権を通して「国際化」を進めているように見える。（学術講演会で英語セッションを作ってもあまり成功しているようには見えない。）この応用物理学会の薄膜表面物理分科会は、私が参加したことのある国際会議として ACSIN や ICSPM、SSNS などを持っているので、それなりに国際化していると言えるだろう。とくに、ACSIN では、1999年にフランスで開催されたときから Nanoscience Prize という国際的な賞が設立され、ノーベル賞を受賞する前に Albert Fert 教授が受賞していたりして、今や国際的に prestigious な賞となっていることは応用物理学会会員の一人として誇らしい。今年の11月には筑波で第12回目の ACSIN が開催され、新しい受賞者が発表されることになっている。

さらに国際的に visible な学会または Division になるためにはどんな工夫があるだろうか。すぐに思いつくこととして、国際サマー（ウインター）スクールの開催、英文の専門書や教科書の刊行（海外の出版社から）、国際的な若手賞の創設などがあるかもしれない。いずれも単発的なものではなく継続的に実行されること、そしてそれらの運営に若手と外国人に参画してもらうことで意義がさらに大きくなるだろう。奥ゆかしい日本人は海外に向けて組織的にアピールするのが苦手なのかもしれないが、この分科会が持っているポテンシャルを有効活用すれば、さまざまな方法でその存在感をよりよく国際的に示せる Thin Film and Surface Physics Division になると思うのだが...